

● 1月選評

小島なお

・登りびと（福岡県）

ラーメンに正しい作法初座敷

茶道に武道に華道に。なんにでも作法はある。たとえそれがラーメンだったとしても、作法に準ずることで所作に、新年のすがすがしい座敷に一陣の風が吹く。

・五代 康成（埼玉県）

正しさが 正しさでなくなる

ダムができた

新たな知恵袋。

出来事の、声の積み重ねで正しさはいつか覆る。一滴の雨がダムに溜まってゆく時間をかけて、私たちは知恵を溜めておく容量を確保しなければ、

・ほのふわり（京都府）

そうこれは自我のおつり

金銭と引き換えに得る自我。想定していた自我の価値から本来の自我の価値を差し引いたものがおつりの値段になる。その差がひらくほどたぶん苦しい。

・azusa（京都府）

隣の星から聞こえる笑い声

わたしはきつと碧い瞳

すぐ隣の部屋は、果てしなく遠く、自分を隔てた場所に浮かぶ。笑っている人たちも内容も知りようがない私は、異星人としてその声に耳をそばだてる。

・仄（福岡県）

思い出の上演会

丑の刻に花咲かす

記憶を共有する人たちを集めての思い出の上映会。午前1時から3時は、懐かしさと疲れてハイになる時間帯だろう。同時に丑の刻は呪いの刻でもある。

・然事 乍（石川県）

死にたくないなど夜道ひとり

白くて大きなコートを買った

白くて大きなコートに身を隠して、何から自分を守っているのか。闇に溶け込まないコートのなかの空間には、死へ近づく夜の時間が流れないとしても。

・澤田 幸季（神奈川県）

歯磨き粉がついた

ダウンジャケット

ダウンジャケットを着ながら歯磨きをしたひと。私の知り得ないそのひとの生活の痕跡は、他者をほんの一瞬だけ家族の領域に強引に引き込む力がある。

・のもしゅうへい（神奈川県）

駅前のロータリーを

失敗みたいに見える夜半

ひとつも街も寝静まった夜半のロータリー。えぐっているのは夜か私か。きのうを引き摺りながらまだ不定形な泥のような空間を、ほの暗い精神が暴きだす。

・にしざわゆうと（福井県）

煮込んだら減るし
みんなもいるんだし

鍋つゆもシチューも煮込むほどに味が濃くなり、嵩は減ってゆく。みんながいることで煮詰まる関係の安心感と心地よさにすこし咳き込みそうになる。

・志内 悠真（京都府）

雨ですか？

それともサラダステイックは
何もつけずにいく君ですか

マヨネーズか味噌か、塩か。そのどれでもないさきにある「何もつけずにいく」選択肢。それはもう好みの問題ではなく、君そのものの提示である。